

自然としての人間／人間としての自然（前半）

浅野慎一『人間的自然と社会環境：人間発達の学をめざして』大学教育出版、2005年

第I部 人間環境と自然・社会

第2章 自然としての人間／人間としての自然（前半）

《克服すべき「常識」》

地球や自然は有限だ。だから人間の生産力や欲望に「成長の限界」を設け、あるいは循環型の経済・社会を構築しなければならない。

【1. 「限りある自然」説の陥穽】

「地球や自然・資源には限りがある」？

ex) マルサス（1798年）『人口の原理』¹⁾：土地(earth)＝有限、人口増加＝無限。

→食糧不足、飢饉、戦争、伝染病→人口減少。

→破局回避のため、理性的・道徳的な出生率低下・人口抑制を。

1970年代～、新マルサス主義：ローマ・クラブ『成長の限界』²⁾：

人口増加・工業化等→資源枯渇、食料不足、環境破壊に直面。コンピュータ・シュミレーション。
地球・資源の有限性を認識→工業化・経済発展・人口増加を抑制すべき。

ローマ・クラブ、1990年代：新たなコンピュータ・シュミレーション。『限界を越えて』³⁾。

「多くの資源や汚染のフローがすでに持続可能性の限界を越えて」しまった。

BUT 「後退的な、速度をゆるめた、癒しの未来」への可能性はまだ残されている。

地球の有限性を前提→物質消費、工業成長、人口増加を抑制すべき。

環境倫理学：加藤尚武氏⁴⁾

「地球の生態系は開いた宇宙ではなくて閉じた世界」。

「環境と資源の限界に人類の文化が直面するのは目に見えている。無限の増大はありえない」。

「人口を増やすなら、生活水準を下げるべきだというのが、自然の掟である」。

見田宗介氏⁵⁾：資本主義＝「地球的な環境と資源の有限性という、新しく絶対的な臨界に遭遇」。

＝「先進」諸国で一定のリアリティをもって受容。

BUT 自然・資源の限界論：いくつかの問題点

自然・資源の定義＝人間の知・生産力によって変化。

ex) ボーキサイト、生物遺伝子、自然の「限界」？。

∴ 経済・産業の「成長の限界」＝確定不能。

「自然＝有限」という発想＝人間が自然の客観的限界を認識し、その範囲内で自然を完璧に制御可能との根本的誤謬。

「循環型」の経済・社会＝自然のメカニズムの完璧に認識・制御。

計画的に利用（再利用・利用制限等）？

＝永遠に実現不可能。

【2. 人間と生態系・生物多様性】

人間が自然を主体的に維持・再生産しなければならない理由

＝人間が自然の一部としてしか生きられない。

ex) 食物連鎖、分解、生殖、共生、呼吸と光合成の連鎖等、
益獣としてのオオカミ、共棲菌、寄生虫

他の生物種と人間の複雑な共生関係、他の生物種が人間の生存に果たす重大で複雑な意味＝ほとんど未知。

ex) ラブロック『地球生命圏』⁶⁾：

植物の光合成→酸素創出→水素、水・海洋の維持。

植物＝川・海に埋没→炭素原子を固定化→空中の酸素分子の比率保持。

微生物の発酵→メタン→大気中の酸素濃度の調節に寄与。

微生物の代謝→アンモニア→地球環境の酸性度を制御。

人間＝自らの生存の必要に基づき、現在の生態系・生物種の多様性を維持しなければならない。
現在の自然・生態系＝人間にとってつねに好都合とは限らない。

ex) 感染症、害獣、自然災害。

老子「天地は仁ならず、万物を以て芻狗と為す」⁷⁾。

→人間＝生存するために自然を主体的に改造する必要。

ex) 天然痘ウイルスの「絶滅」。ヘリコパクター・ピロリ。

人間：否定的意味でも、他の生物種との複雑な関係、他の生物種が人間の生存に果たす重大で複雑な意味＝未知。

∴ 共生と闘争の単純な二者択一＝無意味。

闘争と共生＝生物種や個体の「生命－生活 (life)」を維持する表裏一体の関係。

ダーウィン『種の起源』⁸⁾：

「生存闘争という言葉、ある生物種が他の生物に依存するということや、個体が生きていくことだけでなく子孫をのこすのに成功すること（これはいっそう重要なことである）をふくませ、広義にまた比喩的な意味にもちい」る。「ヤドリギは、リンゴやそのほか数種類の樹木に依存して生活しているが、しいていえば、これらの樹木と闘争しているともいえる。おなじ木にヤドリギがあまり多く生育しすぎると、その木はしおれて、枯れてしまうからである。しかしおなじ枝に密生したヤドリギの多くの芽生えが、相互に闘争しているということは、いっそうたしかにいうのであろう。ヤドリギの種子は鳥によって散布されるから、ヤドリギの存続は鳥に依存しているわけである。それゆえ比喩的には、ヤドリギは果実をならせる他の植物と、他のものより多く鳥をひきつけ果実をくわせて種子を散布させるために闘争しているということができる。私は、たがいにつうじるところのあるこれらいろいろの意味で、便宜のために生存競争という共通の言葉をもちいるのである」。

エンゲルス『自然の弁証法』⁹⁾：

「ダーウィンがでるまでは、今日の彼の信奉者たちがさかんに強調していたのは、たとえば植物界は動物に栄養と酸素とを供給し、動物は植物に糞とアンモニアと炭酸を供給するというような、生物界の調和的な協働ということだった。ダーウィンが認められるようになると、とたんにこういう人々はいたるところに闘争だけを見るようになる。二つの見解は狭い限界の内部では正しいが、しかし両者はともに等しく一面的であり偏狭である。生命なき自然物の交互作用ということは調和と衝突とを含意し、生命ある自然物のそれは意識的および無意識的な協働と意識的および無意識的な闘争とを含意している。だから自然においてさえ、一面的な『闘争』ということだけを旗印にかかげることは許されない。まして歴史の発展と錯綜のこのうえなく多彩な富の全体をひらからびて一面的な『生存闘争』の空言で包括してしまうというにいたっては、これはまさに見事に類することである」。

【3. 人間と宇宙・物質環境】

人間＝宇宙・地球環境の微妙なバランスの中でのみ発生・生存。

ex) 太陽の光・熱、惑星・隕石の軌道と引力、地球の位置。

地球≠閉鎖的システム。

ex) 地球＝宇宙を漂う鉄・ニッケル等を核として形成。

恐竜絶滅←巨大隕石の地球衝突。

生物体の主要元素＝赤色巨星内の核融合反応で作られ、地球に飛来。

ボールディング¹⁰⁾：「開いた経済」→「閉じた経済」への転換。

「開いた経済」＝広大無縁な平原のような無限の地球・自然を征服・開拓してゆく「カウボーイの経済」。

「閉じた経済」＝どんな無限の貯蔵庫ももたない宇宙船のような地球を前提とした「宇宙人の経済」。

→人間＝「宇宙船地球号」の乗組員として、循環的な生態システムの中で生存を維持。

NO！ カウボーイが「開拓」した平原＝有限。宇宙＝人間にとって無限。

エントロピー論：地球が外部から受けるエネルギーは太陽光のみ。

熱＝高温部から低温部に一方的・不可逆的に伝達。分子運動の不規則性（エントロピー）の増大。

→物質循環を維持するには、エントロピーの増大を抑制しなければならない。

人間が永遠に利用可能な地球上の低エントロピー＝水と光合成による有機物質のみ。

降水・太陽輻射の受け皿としての地球・土地面積＝有限。水・光合成による有機物質も有限。

→いつか枯渇する鉱石・石油等でなく、永遠に利用可能な、ただし有限の水や生態系を維持・再生

産する資源利用を構築する必要。

NO! 宇宙から地球に入射：太陽の光や熱だけではない。

地球と太陽の距離、太陽それ自身も変化。地球は閉鎖システムではない。

地球の温暖化や寒冷化、大気圏の変化、空気・土壌・水質の変化、地殻やプレートの変動、諸惑星や隕石の軌道、太陽の変化、宇宙のあらゆる物質とエネルギーの循環における諸変化
＝人間にとって重大な環境問題。

ex) 巨大隕石の地球衝突、氷河期・間氷期、オゾン層の動向、大気中の酸素濃度。

【4. 人間の自然改造】

人間：脳の発達（因果関係の認識に基づく目的意識性の獲得）→大規模、かつ様々な形で自然を改造・制御。

ex) 農耕・放牧＝狩猟・採集による無制限な自然環境破壊を抑制する新たな意識的な自然改造。

人間の自然に対する目的意識的な働きかけ、自然の意識的改造・制御の営み＝「労働」。

人間＝労働によって初めて自らの生存を可能にし、人間という生物種に「なってきた／進化してきた」。
マルクス『資本論』¹¹⁾

「労働は、まず第一に、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である」。「われわれが想定するのは人間にのみ属している形態の労働である。クモは織布者の作業に似た作業を行うし、ミツバチはその蟻の小室の建築によって多くの人間建築師を赤面させる。しかし、もっとも拙劣な建築師でももっとも優れたミツバチより最初から卓越している点は、建築師は小室を建築する以前に自分の頭のなかでそれを建築しているということである。…彼は自然的なものの形態変改を生じさせるだけではない。同時に、彼は自然的なもののうちに、彼の目的——彼が知っており、彼の行動の仕方を法則として規定し、彼が自分の意志をそれを従属させなければならない彼の目的——を実現する。そして、この従属は決して一時的な行為ではない。労働の全期間にわたって、労働する諸器官の緊張のほかに、注意力として現れる合目的的な意志が必要とされる」。

エンゲルス『自然の弁証法』¹²⁾

「動物もまた、人間ほどではないにしても、やはりその活動によって外部の自然を変化させ、またそれらの活動によって引きおこされた彼らの環境の変化は、すでに見たように、こんどはそうした変化の当の推進者の上に反作用してこれを変化させる。…しかし動物が自分たちの環境に持続的な影響を及ぼすとしても、それはそれと意図することなしに生じたことであって、これらの動物たち自身にとっては多少とも偶然的なことなのである。ところが人間が動物から遠ざかれば遠ざかるほど、自然にたいするその影響は、あらかじめわかっている特定の目標にむけられた、まえもって考えぬかれた、計画的な行動という性格をますますもっておびるようになる。…要するに、動物は外部の自然を利用する（傍点）だけであって、たんに彼がそこにいあわせることで自然のなかに変化を生じさせているだけなのである。人間は自分がおこす変化によって自然を自分の目的に奉仕させ、自然を支配する。そしてこれが人間を人間以外の動物から分かつ最後の本質的な区別であって、この区別を生み出すものはまたもや労働なのである」。

BUT 人間＝宇宙・自然の因果関係のすべてを認識しつくすことは永久にできない。

∴ 人間＝あくまで宇宙・自然の一部。その逆ではない。

宇宙・自然＝究極的にはその終焉に向かってつねに変化・発展。

人間の発生－進化＝宇宙の変化・発展の一コマ。

宇宙・自然の変化の速度・多様性＝つねに人間の知の進化のそれを上回る。

ex) 未知の生物種、地球・地殻、宇宙、環境ホルモン、地球温暖化の原因、放射性核種の処分法。

つねに変化・進化・消滅しつつある宇宙・自然の膨大な情報量 > 今日の人類と旧石器時代の人類の知識量の差。

【5. まとめ】

《克服すべき「常識」》

地球や自然は有限だ。だから人間の生産力や欲望に「成長の限界」を設け、あるいは循環型の経済・社会を構築しなければならない。

NO! 地球・自然＝人間にとって無限。（人間は自然の一部。有限なのは人間）

∴ 人間：自然を完璧に認識・制御する循環型の経済・社会を永遠に実現不可能。

& 自然：つねに人間の「生命ーら意かつ」の維持に好都合とは限らない。

∴ 人間；自らの「生命ー生活」の必要に基づき自然を変革・改造し続けなければならない。

人間：自然の一部としてしか生存できないからこそ、自然を主体的に維持しなければならない。

& 脳の発達・因果関係の認識→目的意識的な自然改造。

= 「労働」を通して、人間という生物種に「なってきた／進化してきた」。特異な進化。

→人間：「生命ー生活」を維持するため、より深く因果関係を認識、危機回避に向けて目的意識的に行為。

補注・参考文献

- 1) マルサス, T. R. (1985) (大淵寛他訳) 「人口の原理」南亮三郎監修『人口論名著選集』中央大学出版部、マルサス, T. R. (1962) (高野岩三郎・大内兵衛訳) 『人口の原理』岩波文庫、29～31頁。
- 2) メドウズ, D. H. 他 (1972) (大来佐武郎監訳) 『成長の限界』ダイヤモンド社、8～13・71～72頁、
- 3) メドウズ, D. H. 他 (1992) (茅陽一監訳) 『限界を超えて』ダイヤモンド社 III～VI、10・18・265～266頁。
- 4) 加藤尚武 (1991) 『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー、8・14・68頁。
- 5) 見田宗介氏 (1996) 「環境の社会学の扉に」『環境と生態系の社会学』岩波書店 3～4頁
- 6) ラヴロック, J. E. (1984) (星川淳訳) 『地球生命圏』工作社 14・56～57・61・65・134～136・138～142・288頁、ラヴロック, J. E. (1989) (スワミ・プレム・プラブダ／星川淳訳) 『ガイアの時代』工作社 16・51～52・120・156頁
- 7) 金谷治 (1997) 『老子』講談社、28頁
- 8) ダーウィン, C. (1963) (八杉竜一訳) 『種の起源』岩波文庫 上 86～87頁
- 9) エンゲルス, F. (1968) 「自然の弁証法」『マルクス・エンゲルス全集』20巻 大月書店 609頁
- 10) ボールディング, K. E. (1975) (公文俊平訳) 『経済学を超えて』学習研究社
- 11) マルクス, K. (1983) 『資本論 2』新日本出版社 304～305頁
- 12) エンゲルス, F. (1968) 「自然の弁証法」『マルクス・エンゲルス全集』20巻 大月書店 489～491頁